



1952年当時のカタログ



「MI-6264-B」の正面中央ホンの中心部に2重の円錐状のアルミ製デフューザーが装着されている。低音はホンの上下左右のスリットからドライバーの真後ろに後方向きに装着されたウーファーからバックロード形式で前に放出される設計になっている。このタイプのキャビネットは他社にも例がなく、独自のスピーカーシステムを他にもいくつか開発してきた RCAらしい超大型のオールホーン型の同軸スピーカーシステムである

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ピンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回はRCAが1950年代に開発した大型ホーンタイプのシステムを紹介しよう。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

第43回 RCA

1930～50年代頃のアメリカは西海岸のハリウッドをメインとしたWestern Sound Electric 社と東海岸のN.Y.を拠点とする RCA 社が革新的な音響システムを開発して映画サウンドを支えていた。当時は観客動員数が日々大きくなり、それとともに劇場も大型な規模になっていったため、スピーカーシステムも Western Electric 社のミラフォニックシステムや RCA 社の Ubangi システムなどの超大型タイプが開発された。

MI-6264-B

1950年代に開発された Twin-Power Loud speaker と表された大型ホーンタイプのシステム。キャビネットは縦横1mくらいの木製で正方形のバックロードホーン型。正面中央にアルミ製の円錐状のホーンと1.8インチの大型ドライバー、その後部に38cmウーファーを後ろ向きに搭載した同軸タイプの2ウェイシステムになっている。ウーファーとドライバーは他の RCA システムにも使われている機種であるが、円錐状の金属ホーンと大型の特殊な構造のキャビネットはこのシステム専用で開発されている。当時は使われる会場の大きさなどで縦横に数個スタックして使われていたようである(写真の下の専用台は特注で製作したもの)



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのピンテージオーディオ



「MI-6264-B」のホーン&ドライバー。円錐ホーンの直径は43cm、長さは37cm、ドライバーを装着すると全長は約50cmとなる



「MI-9548」のドライバー。フェニリック樹脂製の1.8インチ振動板を持つRCAの大型ドライバーで Western Electric 社の594ドライバーに対抗して開発されたフィールドタイプ。RCA MI-1443ドライバーのアルニコタイプとして数多くの当社のシステムに装着されている

「MI-9449」のウーファー。38cm口径でコルゲーションタイプコーンのフィクスエッジウーファーである。ボイスコイル系が2インチと38cmウーハーとしては比較的小さくフルレンジ的な鳴り方をする。こちらもフィールドタイプのRCA MI-1444 ウーファーのアルニコタイプである

RCA / MI-6264-B

音圧と高い描写力にジーンとなる
対怪獣用兵器」とか言ってごめん

このRCA社のステージ用スピーカーMI-6264は以前からアトリエJe-teeにストックしてあり、気になつて仕方がなかった。奇抜なSF的デザインが強く目を惹くが、いったいどんな音がするのかまったく想像できない。僕は昭和の東宝特撮映画に出てくる対怪獣用兵器(中央から光線を照射するイメー、具体的にはメーサー殺獣光線車)を拝むような気分になっていて、それはすなわち、目茶苦茶カッコいいという思いに直結している。

この個体はラスベガスのシヨウで実際に使われていたらしく、会場が広ければ、それに合わせてスタックしていったらしい。何段も積み重なっている様子を想像するとRCAという会社は途轍もないことを敢行するなと感じ入る。まあ、これを個人の部屋に収めるといってもデザインやサイズからいって、とんでもないことではあるのだが。

スタートはヘレン・メリルの定番曲「ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーン・トゥ」。イントロの段階で、コンシューマーのスピーカーじゃない、映画館の音がすると率直に思った。ホーンシアターのサウンドではなく、リアルに劇場で聴くような盤石の安定感と重量感がある。アルミとウッドを素材にしたホーンが音を放射状に飛ばすモンスターな外観だが、いつも真つ当に音をまとめるRCA社らしい堅実な音でもある。

次はデューク・エリントンの「エリントン66」から「酒とバラの日々」。ビッグバンド・ジャズも思っていた通りうまくハマる。部屋の空気を隅から隅まで動かす感じ。音の前に飛ばす圧が高い。そうでなければ会場のお客さんは満足させられないはずだ。

同じような感想を抱いたのは、フランク・シナトラの「夜のストレンジャー」だ。長年伴奏を務めてきたネルソン・リドル楽団の調べにシナトラの歌声が包まれる。ハリウッドの広大なスタジオの空気がこちらに伝わってくる。非常に豪華な録音であることが伝わる。

ここでもまったく雰囲気を変えて、バッハの無伴奏チェロがしめやかにかかる。豪快なサウンドは得意としても繊細な表現はどうかといったチェックだ。トウイーターとドライバーの同軸配置が利いているように音像がぎゅっちり締まっている。業務用スピーカーにありがちな突進力一本槍の音ではなかった。

またまた音楽ジャンルを変えて荒井由実の「卒業写真」。描写がいていい。何十年振りか聴いて、ジーンとなつてしまった。対怪獣用兵器とか言ってごめん。なお、僕が試聴時したすぐ後にMI-6264用の専用アンプがアトリエJe-teeに入荷したそう。次回の取材でぜひその正規コンビの音も聴きたい。それまでに売れなければいいのだが。